

「これが高齢者の世界なのか。」

私は強い衝撃を受けた。

今年度から参加しているジュニアボランティアの活動。夏休み中には、高齢者との交流及びサポートを行った。その活動の中で、「高齢者の世界」を体験する機会があった。レンズが曇ったゴーグル、大きなヘッドホン、重りが入ったベストを身に付けると、体に違和感を覚えた。濁った視界。かすかに聞こえる周りの音。動くことも難しい体の重さ。私はそこで初めて、高齢者の世界を目の当たりにした。

私の曾祖父は、今年で九十九歳になる。体はとても丈夫で、健康的な生活を送っているが、年齢に伴い、認知症が著しく進行している。家族の名前を思い出すことは難しく、食事をしたことも忘れてしまう。

記憶障害の悪化は、認知症の初期症状である。仕方がないことだとわかっていても、やはり少し心が痛んだ。

「今まで一生懸命に頑張ってきたから、もう頭を休めて、徐々に忘れてもいいんだよ。」と母が教えてくれた。今までたくさんの思い出を詰め込んだ分、忘れてしまうのは当たり前。曾祖父が忘れてしまった思い出は、私たちが覚えていればそれでよいのだ。そう考えると、私の心は軽くなった。

しかし、歳を重ねるにつれて認知症は進行し、曾祖父は週に一回のデイサービスを利用することにした。介護をしている祖母の負担が減り、曾祖父は多くの人たちとふれあうことで気分転換になっている。

また、一部のサービスには介護保険が適用され、医療費控除の対象になるそうだ。

私は曾祖父の介護を通じて、私たちの健康や生活を守るために欠かせない社会保障制度を知った。それは、医療、介護、年金、子育てなどにかかる費用の負担をみんなで分かち合い、支え合う制度だ。つまり、誰かが誰かを支え合う、お互い様の制度なのだ。

現在日本では、急速に少子高齢化が進んでおり、それに伴い社会保障費用は、急激に増加している。そのため、日本の社会保障は老人福祉を中心とする社会福祉、介護などに重点が移ってきた。時代によって、どこに相対的な重要度をおくかは必然だと思う。

しかし、いつの時代であっても、国民一人一人が正しく税金を納めることが必要不可欠であり、さまざまな場面で税の恩恵に助けられていることを忘れてはいけない。

曾祖父がつないでくれたこの命を、この社会を次は私がつなぐ番だ。そのために私は、将来を考え、自ら進んで行動できる大人になりたい。これからの未来も明るいと感じて。